

MRI ECONOMIC REVIEW

株式会社三菱総合研究所
政策・経済研究センター

米大統領選の行方(3) 大きな政府か小さな政府か

共和党は、もともと奴隷制反対や産業振興を掲げ、北部の白人知識層や企業家が主に支持していた。1930年前後の大恐慌を経て、基本思想として「市場重視」と政府の介入を最小限にする「小さな政府」を確立した。これが80年代のレーガン大統領の自由主義的経済政策「レーガノミクス」や2000年代のブッシュ減税につながる。

一方、当初は南部の白人労働者や農場主らが主な支持基盤だった民主党は、大恐慌克服のためルーズベルト大統領が実施した公共事業中心のニューディール政策でリベラル色を強めていく。基本的には政府が介入を強める「大きな政府」で、福祉重視の政策や規制に積極的だ。公共投資や政府の産業協力を重視したクリントン大統領の「クリントノミクス」も、この流れに位置づけられる。

ただし政策は経済社会環境に左右される。50年代の共和党のアイゼンハワー政権の政策は、州間高速道路の整備や社会保障の充実などリベラル色が強かった。70年代の民主党のカーター政権は、流通や運輸、金融、通信などの規制緩和で産業活性化を図り、自由主義的な政策を採用した。

クリントン政権時は財政収支が黒字化したが、2000年代のブッシュ政権時は赤字が拡大。レーガン大統領は保護貿易を進め、クリントン大統領は対日貿易では保護主義だったが北米自由貿易協定を批准した。

リベラル色の強い政策が極端に進むと財政悪化や経済停滞、産業競争力の低下をもたらす。一方、自由主義的政策の行き過ぎは金融危機や格差拡大につながる。現在の米国は変化を求めている。

共和党と民主党の違い		
	共和党	民主党
基本的な思想	規制緩和など 小さな政府	福祉、公共事業、規制強化(大きな政府)
	自由競争、市場重視	自由実現へ政府が介入
	宗教的には保守	宗教的には自由
代表的な経済政策	80年代の自由主義的経済政策「レーガノミクス」	手厚い政府支出による経済政策「クリントノミクス」
	ブッシュ減税	ニューディール

※本コラムは、日本経済新聞の「ゼミナール」に2016年3月4日から17日まで10回にわたり掲載されたものです。

内容の全部または一部を無断で複写・転載することは禁止されています。